

急須

なぎけいし
南木佳士

小学生の頃、趣味といえば急須を磨くことだった。安価な万古焼の急須を乾いた布巾でこすっていると、やがて艶が出てくる。それが無性にうれしくて毎日磨いていたのだった。

群馬の山村の古い家で、掘りごたつにあたりながら、あるいは縁側に腰かけて祖母の茶飲み話を聞いていた。テレビのない時代だったので、お婆さんたちの雑談に耳を傾けているより他に時間のつぶし方がなかったのだ。田舎育ちの子のくせに、友だちと外で遊ぶのは好きではなかった。となりのしまちゃんや、そのとなりのおよねさんなどが祖母の茶飲みの相手だった。およねさんはすでにほけかか

っていて話がよく分からなかったが、しまちゃんはときおり怖い話題を口にした。

秋の台風で山向こうの村の裏山にある墓地在崩れ、流された。翌朝、山の斜面に建つ家の主が裏にたまった土砂をスコップで片づけていたら、土の中から一カ月前に土葬にしたばかりのその家のお婆さんが立ったまま出てきた。しまちゃんの話はそれだけだったが、思わず急須を



万古焼の急須

磨く手を止め、

「おっかねえなあ。」

と、声を震わせてしまった。

「死んだもんなぞ、なんのおっかねえこんがあるべえかな。ふんにおっかねえのは生きてるものここだわな。」
しまちゃんは笑いながら白髪の乱れる自分の頭を指さしていた。

こんなふうには、老婆たちの会話は含蓄に富み過ぎていたから、幼かった小学生には十分に消化できなかった。だから、それらの断片はそのままのかたちで今でも記憶の倉庫の片隅に保存されている。四十歳の峠を越えた頃より、古びた一言半句の真意がふと理解できる瞬間が訪れるようになった。しかし、懐古の微笑は浮かばない。むしろ、このまま坂を下ってゆけば、あの頃の老婆たちの年齢に限りなく近づきつつあるのだと自覚させられて呆然ぼうぜんとしてしまう

のである。

急須磨きの趣味は中学一年まで続いた。週に一度、鉾山の社宅から帰ってくる父は急須などにうつつをぬかしている長男を厳しくしかっていた。

「そんな老人くさいまねはやめろ。」
父のヒステリックな言葉の裏には祖母への反感が込められているようだった。

婿としてこの家に入ったものの、妻に先立たれてしまい、その後には再婚して家を出た彼の複雑な立場がおぼろげながら理解できるようになったのは大学生になってからのことだった。祖母は母の死後さっさと再婚を決めた父をこころよく思っておらず、孫たちはおれが育てるから、と強く主張していたらしい。

父としては二人の子供を鉾山の社宅に引き取って新しい妻とともに暮らしたかったのだろうが、すっかりお祖母ち

1 万古焼 三重県四日市市付近で作られる陶器。

参照。「英語」hysterical

「祖母への反感」とはどのような思いか。

2 ヒステリック ヒステリー的であること。七九ページの注6

〈安価〉〈布巾〉〈艶〉
*無性に
*うつつをぬかす

やん子になってしまった子供たちは彼について行くのを泣いていやがった。しかたなく、週末に帰って一日だけ子供たちの顔を見、またバイクで二時間かかる鉾山にもどる生活を続けていたのだった。

自分の足場である家庭がそんな不安定な状況に置かれているのは子供心にも肌で感じていた。そんなわけで、急須磨きにのめり込むことで崩れそうになる精神の平衡を保とうとしていたところもあったのである。

しかし、三カ月も磨いてようやくいい艶が出始めたなと思う頃、必ず注ぎ口の先をどこかにぶつけてかいてしまった。祖母はそこに透明なビニールの管を切ったものを押し込んで平気な顔をしていたが、どこかがかけ、完全なかたちを保てなくなった急須にはすぐに興味がなくなり、それ以上磨く気がしなくなった。

「急須は茶をいれるもんだから、茶がはいりゃあいだんべや。」

祖母が懸命になぐさめてくれたのだが、一度ふてくされてしまうと手をつけられず、飯も食わない、学校にも行か

ている川音に消されて、割れた音は耳に届かなかった。その分だけ、頭の中に鋭い破砕音が創り出されてしまい、家にもどってからも耳の奥で執拗に反響し続けていた。

再び急須を磨き始めたのはそれから十年後、秋田で医学生として暮らして四年目の秋だった。大学では内科や精神科などの臨床医学の講義が行われていたが、出席する気力をまったくなくしていた。それでも夏休み前まではなんとか半分程度の講義には出ていたのだが、休み明けからは出席ゼロになってしまった。

大学に行くつもりはあり、行かなくてはと六畳一間のアパートで目覚めはするのだが、布団の中で退屈な教室の様子を想像してしまうともうだめで、そのまま膝を抱えて再び眠ってしまうのだった。刺激の少ない北国の小都市での生活にすっかり飽きていたし、このまま漫然と医者になっ

ないありさまだった。根負けした祖母が新しい急須を買ってくれると、即座に態度を変え、へらへらと創り話などしながらひまさえあれば磨いていた。

中学一年の終わる春、一足先に東京の鉾山会社の事務職となつて東京に出ていた父について転校することが決まった。その頃、運よく二年間もかけたところのないまま磨いてきた急須があった。黒く錆びた鉄の玉を油で磨きあげたような、硬質の光沢を放つ急須だった。

明日東京に旅立つ日、その急須を手にして谷間の集落の底を流れる川の岸に立った。ネコヤナギの固い芽に春の予感があったが、川面を吹く風の冷たさはまだ冬のそれだった。

何度かためらった。このまま東京に持って行っても、それはそれでいいのではないかと妥協に傾きもした。だが、ふいにセーターの背を押しした突風にうながされて、急須を思いきり投げ出した。

澄んだ青空を背景に鈍い光を放つてから、急須は川の中に

てしまうことへのためらいもあった。理由は後になればいくらでもつけられるのだが、このときはただ行きたくても行けなかったのである。大学に向かって自転車をこぎ出すと頭痛や吐き気がし、遠ざかれば症状は消えた。いかにも勝手すぎる体だとあきれ果てはしたものの、実際に気分が悪くなってしまうのだからどうにもならず、アパートの万年床に引き返して小説など読むしかなかったのだ。

午後三時になると銭湯が開く。老人たちと一番湯に入ると心身ともにすっきりしてなんでもできそうな気になってくる。なんのことはない、朝悪くて午後から夕にかけて気分が回復してくる軽症うつ病の症状そのものなのであるが、不勉強で無自覚な医学生が気づくはずもなく、なんとかその日その日をなだめ暮らしていたのだった。

銭湯の脇の狭い路地を入ったつきあたりにお茶を売る店があった。色あせた紺色ののれんに白く染めぬかれた

3 ネコヤナギ ヤナギ科の落葉低木。早春に灰白色の花穂をつける。しにしてある寝床のこと。

2 「その日その日をなだめ暮らしていた」とはどのようなことか。

4 万年床 昼夜関係なく布団を敷きっぱなし

*肌で感じる

*ふてくされる

*根負けする



ネコヤナギ

「茶」の字が破れて読みにくくなっていた。

ある日、新装開店に並んで遊んだパチンコで三千円もつけた。国立大学の授業料が月千円だった頃の三千円である。風呂に入り、さてあぶく銭でなにかうまいものでも食うかと外に出たら、この貧相なお茶屋が目に入った。そういえばこのところ上質な煎茶を飲んでいない。羊羹ようかんでも買って帰り、ゆつくりと茶でもいれようか、となんの気なしにき

「これ、いくらですか。」

値札が付いていなかったので、急須を手に取り、ガラスケースの上に置いた。

主人はめんどくさそうに本から目を上げ、眼鏡を下にずらしてこちらを見た。黒ずんだ顔に似合わない澄んだ目だった。
5

「三千円。」

喉のどこかから息のもれているような細かい声だった。

この主人を相手に値引きの交渉をするのは気乗りがしなかったので、ちよとズボンのポケットにあった三千円を出した。
10

「学生さんかね。」

主人は無造作に置かれたガラスケースの上の千円札から目をそらすようにして下を向いた。

「はい、そうです。」

早く急須を手に入れたかったから、足踏みをしながら答

5 煎茶 緑茶の一種。
7 芥川龍之介 小説家。一八九二—一九二七年。「鼻」「羅生門」など多数の作品がある。

6 常滑焼 愛知県常滑市を中心とする付近一帯で作られる陶器。朱泥を用いた茶器で知られている。

〈貧相〉〈円筒形〉
〈足踏み〉

15



常滑焼の急須

た彼の第一印象は、はやらない古本屋の店主そのものだった。

いらつしゃいの言葉もなかった。とりあえず右側の棚を見てみると、いきなりかたちのよい常滑焼とこなまの急須に目を奪われた。片方の手のひらで包めるほどのかわいらしい円筒形で、注ぎ口と取手のバランスも絶妙であり、一瞬のうちに欲しくなった。
15

えた。

「急須はバランスが命なんだよ。三千円も出して買うんだから、これだけは試しておかなくちゃいけないよ。」

主人はそう言うのと急須の蓋を取り、取手を下にしてガラスケースの上にそっと立てた。

急須は立った。

「ほら、これがバランスのいい急須なんだよ。基本だよ。何事もバランスが基本だよ。」

主人は弱々しく笑ったが、上と下の前歯が二、三本抜けていて、そこから妙に赤い舌がのぞいていた。

「これ、サービスだから。」

ケースの中から百グラムの煎茶の袋を出す前に、主人は膝の上ののせていた本を端に置いた。

布の装丁が綻びかけた「芥川龍之介全集」の一冊だった。
15

「芥川です。」

サービスの煎茶をもらってしまつて返礼の言葉がとっさ

15

に思いつかなかったものだから、精一杯の愛想^{*}笑いを造つてみた。

「うん、そう、芥川。昔の本だけど、今読みなおしてみると、あらためていいよね。この急須^{*}みたい、芥川の文章はバランスがいいよね。」

煎茶をていねいに包装してくれながら話す主人の口調に秋田^{あきた}訛^{まじ}りがなく、ことによりやく気づいた。

年齢は五十代の半ばくらいなのだろうか。芥川の話になると、か弱^{*}かつた声にいくらか力がこもった。

「芥川[■]の作品ではなにが一番好きですか。」

純粹な本好きらしいと判断して遠慮なく聞いてみた。秋田に来てから、小説を読む友など一人もいなかった。

東京で過ごした中学、高校の間に、文庫本で手に入る芥川の作品はすべて読んでいた。もっぱらストーリーのおもしろさにひかれた子供っぽい読書体験ではあったが、それでもほんの少しだけ、小説を書くという行為の楽しさと恐ろしさを教わった。

「いつまでも芥川ばかり読んでるのは幼稚^{*}だつていう人

いつの間にか陽が暮れかけていて、路地の奥の店内は暗くなつてきた。三杯目の玉露を飲み終えたところで椅子を立った。主人も芥川[■]のものは若い頃にすべて読み終えていゝらしかつたので、このまま話していたら夜になつてしまひそう^{*}だつた。

「いやあ、久しぶりに芥川の話ができて楽しかつたですよ。またいつでも寄つて下さいよ。」

主人は急須を灰色の布巾で包んだ上で、自転車[■]だつたらこうしておかなくちゃあ、と新聞紙を丸めて四方を押さえ、ガムテープでとめてくれた。

路地を出るところでふり返ると、夕闇におおわれたお茶屋はいたるところ板壁がはげ落ち、屋根のトタンも赤錆^{あかさび}に侵蝕^{しんじよく}されつくしているとても貧しげな二階屋[■]だつた。なんでこんな店に入つてみる気になつたのか。講義に出ないで

たちがいるけれど、『秋』なんていいよね。大人の小説だよね。みんなが思っている以上に芥川[■]の作品で奥が深いよ。うな気がするんだよね。」

主人は座敷の上がり口[■]に置いてあつたポットのお湯を注いで茶をいれてくれた。

猪口^{ぶちぐち}に似た小ぶりの湯飲み[■]に、丸く小さな急須で最後の一滴まで注いでくれた茶はさわやかな甘みを含んだ玉露^{たまろ}だつた。出された木製の丸椅子[■]に坐り、ガラスケース越しに主人と向き合つてしばし芥川談議に夢中になつた。

「『秋』には全体に大正末期の東京郊外の秋の空気が感じられるんだよね。セピア色[■]で、品がいいんだよね。せつない恋の物語ではあるんだけど、登場人物たちが澄んだ秋の大気にくるまれていゝるから清潔で上品なんだよね。いいよね、『秋』は。」

互いに芥川[■]の小説の中では『秋』が最高傑作であろうという[■]ことで意見が一致したのだが、主人の淡々とした批評には押しつけがましくないやわらかで確実な説得力があつた。うなずきながら聞いていゝるうちに時の経つ^たのを忘れた。

いゝる間に体内の羅針盤が狂つてしまひ、とんでもない迷路に入り込んでしまつたのか。

正体不明の主人と文学の話をしたあとには、不思議な満足感とともに、手すりのない階段に足を踏み降ろしてしまつたような全身で覚える頼りなさの感覚が残つた。だから、アパートに帰る暗い裏道を、いつもより固くハンドルを握つて自転車[■]をこいだ。

その夜から急須を磨き始めた。朱色の常滑焼には万古焼のごとき硬質の艶は望むべくもなかつたが、朱は朱としてそれなりに磨き出すべき色ははつきりと頭に描けていた。祖母から聞いたところでは茶渋の染みだ布巾でこするとよく光ることだったので、茶殻を布巾の上に捨て、よく揉んで乾かして磨き布とした。

昼頃に起き出し、食事をして茶を飲んでから急須を磨く。

8 『秋』一九二〇（大正九）年発表。姉妹といふこの男性との心理的な三角関係を姉の視点で描いた作品。
9 猪（幼稚）（座敷）（談議）
10 陶器の小さな杯形の器。
11 セピア（暗褐色）
12 玉露（煎茶の一種。独特の甘みと香りにより高級とされる。）
13 セピア（暗褐色）

14 純粋な本好きらしいと判断し「たのはなぜか。」
15 愛想笑ひ
16 力がこもる
17 淡々と

風呂から帰って磨く。夜も眠くなるまで磨く。

外に出るのは二日に一度風呂に行くときだけで、食事は昼と夜の二食のみ。それも風呂のついでにスーパーで買ったきたもやしと魚肉ソーセージを炒めたものやサバの水煮の缶詰などをおかずにして一回に二合の飯を食べていた。

住んでいたのは田んぼに囲まれたアパートだった。稲刈りや脱穀のにぎわいのあと、稲わらを燃やす煙が消え去るとともに周囲が深い秋の静けさに支配されてゆくのを窓の外に見ていた。おまえはなにをしているのだ、とのたまらない焦燥を誘う内なる声が聞こえ出す前に、せつせと急須磨きを開始し、飽きると文庫本の小説を読み、また磨き。

その年の秋は思いのほかの早さで深まってゆき、窓の外にいつにない明るさに驚いて早朝に起き出してみたら初雪が降っていた。九月から十一月まで、およそ三カ月間、一度も大学の講義に出なかったのである。医学部を中退するほどの勇気も決断力もなかった。金のない家に生まれ育ったので、好きな文学を勉強できるほど恵まれた境遇にないのもよく理解できていた。だからこそ、適当に講義でも聴

いて医者になって、そこそこの中流生活を営めれば十分と納得して東京から秋田まで都落ちしてきたのだった。

しかし、医学部の六年間はあまりにも長かった。甘ったれるなど言われればそれまでなのだが、毎日病気の話ばかり聞かされ、肝腎の生きた患者との接触はまったくない。教科書を読めば分かる程度の講義を聴きに大学まで通う単純労働に四年間ですっかり飽きてしまった。医学部というところはもう少し生身の人間の生死にかかわる問題を学ぶところとわずかな期待を抱いていたのだが、それは見事に裏切られた。よるべをなくし、どうしたらいいのかわからなかったもので、とりあえずそこにあつた急須を毎日磨いていたのだった。

初雪の日から二週間ほど経った夕方、こたつにあたつた急須をこすつているところに、一年前の人体解剖実習でおなじ班にいた級友が訪ねてきた。彼は戸口に立ったまま用件だけを伝えた。

今、大学では週に一度、臨床講義というのが始まっている。大学病院から患者を講義室に招いて学生たちが診察し、

その所見を教授に報告する。患者が退出したのち、診察デスクなどをもとにして病気の診断法や治療法を教授が講義するものである。ついては明日、我々の班がその診察当番になっている。頭から足まで、四人で分担して診察するので、一人でもいないとまずい。おまえは腹部の担当だから、明日はぜひとも出てきてほしい。

ダウンジャケットの肩の雪がとけない前に級友はドアを閉めた。聞いている間も口をぽかんと開けて急須を磨く手を休めなかった。級友の目には明らかに哀れみの色が浮かんでいた。

講義に出ないのは自分の勝手だが、班の者たちに迷惑をかけるのは本意ではない。行くしかないか、とすこぶる消極的な背伸びをしてから、その夜、診察手技の教科書を引っぱり出して自分の腹をなでさすりながら急ごしらえの触診の練習をした。

翌日、臨床講義は午後一時からの開講だった。数カ月ぶりに教室に入ったのだが、級友たちは気持ちよいほどに無関心でいてくれた。白衣を着て階段教室の最前列に座り、講義の開始を待った。

前の右側のドアを開き、まず教授が登場した。この秋から内科学教室に赴任して来た人らしい。見事な白髪に銀縁眼鏡をかけたおだやかな人相の初老の教授だった。

「本日の患者さんは五十五歳の男性です。それではお願いいたします。」

壇上の教授の声とともに看護婦の押す車椅子に乗せられた患者が左側のドアから入ってきた。

あっ、と微かだが声が出ってしまった。患者はお茶屋の主入だったのである。三カ月ばかり前に急須を購入した日以来会ってはいない。風呂の帰りに何度か店に寄ってみようと思ったりしましたが、新しい人間関係を築くのがなんとし

12 臨床講義 実際患者に触れつつ学ぶ講義。「臨床」とは、病床の患者に接して実地に診察・治療を行うこと。
13 看護婦 女性の看護師の俗称。現在は、男女の別なく正式名称は、看護師。
4 「消極的な背伸び」とはどのようなことか。

《境遇》《都落ち》
《生身》
*よるべをなくす

でもおっくうだったので敬遠していたのだった。

主人はあの頃よりひとまわりやせ、肌の色も一段と青黒くなっていた。パジャマ姿でうなだれたまま看護婦の手を借りて用意されていたベッドにおおむいて寝た。百人近い医学生たちの好奇の視線にさらされて、主人は目を閉じていた。

教授の指示にしたがって頭部の診察から始まり、学生がドイツ語で所見を述べていくと、教授は、そうですね、とか、もう一度診て下さい、などと言葉をかけていた。腹部の診察は三番目に回ってきた。主人の目は固く閉じられていた。こんにちは、と耳に届く分だけの声をかけてから触診を始めた。

乾いた皮膚の下にすぐ大動脈の拍動を触れるやせきつた体だったが、目立った異常は認めなかった。その旨を報告すると教授は黙ってうなずいた。

ほっとして視線を落とすと、主人はうすく目を開き、微笑みととれる表情を造った。覚えていてくれたらしい。なにか一言でも診察させてもらった礼を述べようとしたが、

足の診察当番になっている次の学生が前に出てきてしまった。かろうじて目の縁をゆるめて返礼すると、主人はわずかに首を折ってくれた。

十分ばかりで学生たちの診察は終わった。お茶屋の主人はまた看護婦の手を借りて車椅子に乗り、教授の黙礼に送られて退出して行った。

「ただいまここにおられた患者さんは肺の小細胞癌¹⁵、その中でもメラニン産生細胞刺激ホルモンを分泌する珍しい癌細胞を有する症例であります。」

教授の声は低いがよくとおった。

患者の肺癌細胞では皮膚のメラニン産生細胞を刺激し、色を黒くさせるホルモンが作られている。だから肌の色が独特の黒さになっていたのである。

スライドで提示された胸部X線写真には右肺の中央に大きな腫瘤影¹⁶が映っており、中心に金属片と思われる濃さの陰影があった。

「患者さんは学徒出陣¹⁷でフィリピンに出征し、同地の戦闘で砲弾の破片を右肺に受けました。それがここに残っている

でも消えず、ノートがとれないまま頬杖¹⁸をついていた。

「小細胞癌は肺癌の中でも最も悪性度が高く、この患者さんの場合も予後は三カ月程度と思われれます。本人は主治医から告知を受けておりませんが、おおむね病気については理解しておられるようで、残される老いた両親の心配ばかりされています。本日の臨床講義は、以上です。」

語り終えて教授は、大きく肩で息をした。

事実の壁の厚さと重さの前に静まりかえっていた学生たちの間にも、さざ波のようにため息が広がっていった。

その夜、こたつの上に急須を置いたままいつまでも腕を組んで座っていた。捨て場所を考えあぐねていたのである。

初めて聴いた臨床講義であったが、患者がたまたま知っ

教授は指示棒でスライドを指しながら淡々と講義を進めていた。

ます。復員して大学を卒業してからは左肺の結核を発病して六年間療養し、以後は高校の国語の教師として東京で暮らしていました。が、両親が老いて病気がちになったために三年前に秋田にもどり、家業のお茶屋を継いでいました。結核のために婚期をのがし、現在も独身であります。もし、5 肺内の異物が慢性の刺激となって発癌することがあり得るなら、患者さんにとってこの砲弾の破片がまさにそれであります。そういう意味では、この人の内なる戦争はまだ終わっていないことになりました。」

次いで肺癌の分類や診断方法などに話題は移っていったのだが、胸部X線写真のスライドの残像が目の奥にいつま

14 大動脈 心臓の左心室から血液を全身に送り込む動脈の根幹。
15 小細胞癌 癌の中でも比較的小さな癌細胞からなるもの。
16 メラニン産生細胞刺激ホルモン 過剰な光を吸収し、有害作用を防ぐメラニンの活性を調節する機能。メラニン合成が促進されると皮膚の暗赤色化が起こる。
17 学徒出陣 太平洋戦争末期、兵力不足を補うために文科系学生に限り徴兵猶予を停止し、入隊・出征させた。
18 予後 病気や、その治療後の経過に対する見通し。

5 「そういう意味」とはどのような意味か。

〈敬遠〉〈拍動〉〈出征〉
〈破片〉〈家業〉〈残像〉
*視線にさらされる
*頬杖をつく
*考えあぐねる

た人だったという以上に、医学がまさに生きている人間を扱う学問なのだとその印象を強く与えてくれた。学ぶべきものの輪郭が見えてきた。この講義を聴くために大学に行く。いつまでも急須を磨いているわけにはいかない。

ちようと田舎から東京に出るときのように、無言だが力強く背を押す風が吹いてきた。アパートの万年床をたたむ時期が来たらしい。

昔やったのとおなじに、急須を割って新しく出直す儀式をすることはかり考えていたのだが、これはお茶屋の主人がバランスを保証してくれたもので、死にゆく彼との唯一

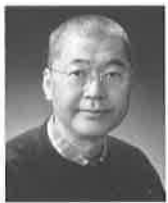
10

6 「捨てられなかった」のは、なぜか。

—(儀式)(唯一)—

の接点であった。もっと小説の話をしてあげればよかった。気軽に店に寄ればよかった。そう思うと捨てられなかった。結局、部屋の冷蔵庫の上に置いたままにしてあった急須は、その後何度かの引っ越しに耐え、二十年後の今も無傷のまま我が家にある。母や祖母の位牌を安置した仏壇に毎朝茶をあげるのだが、それ専用に使っている。妻が瀬戸物の湯飲みなどと一緒に水洗いしてしまうので艶は出ていない。

気がつけばあれから一度も急須を磨いていない。



南木佳士 一九五一(昭和二六)年。小説家・医師。群馬県に生まれた。生と死を主題に、市井の人々を描いた短編作品が多い。『ダイヤモンドダスト』で芥川賞受賞。作品に『医学生』『阿弥陀堂だより』『神かくし』『トラヤ』『草すべり』などがある。この作品は一九九六年に発表されたもので、本文は『冬物語』の文庫版によった。

予習

1. 次の語句の意味を調べておこう。

①含蓄に富む(三九一・上8)

②一言半句(三九一・上12)

③うつつをぬかす(三九一・下3)

2. 本文中に出てくる芥川龍之介の「秋」を読み、その感想をまとめておこう。

構成

1. この小説は、回想形式で書かれている。それぞれの場面の時間について、回想している「自分」の思いに注意しながら整理しなさい。

2. 主人公にとって「急須を磨く」とはどのような行為か。中学までと、大学時代について、それぞれ具体的に説明しなさい。

読解

1. 「急須を思いきり投げ出した」(三九二・下15)のはなぜか、説明しなさい。

表現

1. 主人公が急須磨きをやめて大学に戻ることを決意した理由をまとめてみよう。

2. 「不思議な満足感とともに、手すりのない階段に足を踏み降ろしてしまったような全身で覚える頼りなさの感覚が残った」(三九七・下3)とは、どのような感覚か、説明しなさい。

3. 「事実の壁の厚さと重さの前に静まりかえっていた学生たちの間にも、さざ波のようにため息が広がっていた。」(四〇一・下8)のはなぜか、説明しなさい。

4. 「セーターの背を押した突風にうながされて」(三九二・下15)、「無言だが力強く背を押す風が吹いてきた」(四〇二・上5)とはどのようなことを表しているか、説明しなさい。

5. 「気がつけばあれから一度も急須を磨いていない。」(四〇二・下9)とはどのようなことか、説明しなさい。

重要漢字……

390 須(必須)	390 磨(磨滅)	390 葬(葬式)	391 婚(結婚)	392 硬(生硬)	393 漫(漫画)	393 狭(狭量)	394 坊(寢坊)
395 蓋(蓋然)	396 淡(冷淡)	397 羅(羅列)	397 盤(基盤)	397 握(握手)	398 燥(乾燥)	398 遇(優遇)	398 診(診断)
399 療(療養)	399 壇(花壇)	399 購(購読)	400 旨(要旨)	400 珍(珍重)	400 陣(敵陣)	401 継(継続)	401 慢(怠慢)